

## 心霊科学の知識を宗教へ\*

(\*編集部注：本文は1972年に宗教関係の人々との交流会での講演「心霊科学と宗教との関連性」の記録の一部である。)

### 心霊科学とその発達

心霊科学とは、心霊現象を対象とする科学的研究である、しかし、この分野の研究は、その隣接科学である心理学、生物学、医科学といった諸科学に比し、研究対象が、より非実体的なものであることと、それに加えて隠微をきわめたものであるため、その研究過程において当然極度の困難が伴う。とって、その検証の重要な武器といえるものは、既成科学の研究手法と同様「実験」と「観測」で基づいていることには何の違もない。

この研究の発端となったのは、1848年(嘉永元年)北米の一寒村ハイヅヴィルに起きた、いわゆるフォックス家の幽霊事件といわれる「怪音現象」の生起に端を発する科学的研究から創まったのである。しかし、歳月は流れて、すでに一世紀以上を経ている今日ではあるが、残念なことに、わが国の学界はこの科学を取り入れようとしていない。したがって、一般人にもあまり親しみのない学問という以前に、その対象である「心霊」なるものに極度の伝統的誤解曲解が優先し、あるいは宗教的の考え方とか、荒唐無稽とか、さらに蔑視の立場から、学者のおおむねはホオカブリ主義に徹してきた。

しかし近頃では、心理学界に取り入れられようとしている超心理学の登場が、その提言者ライン博士(アメリカ・デューク大学教授)の言葉にあるように、心霊現象を指す用語であるといったところからか、そのホオカムリを徐々ではあるが、取り去ろうとする傾向がでてきたことは、昔のような詐術視を強調する学者がやや少なくなってきたとも受け取られよう。

何と言っても、心霊現象は事実である、この研究の端緒となった怪音(ラップ現象)も事実である。しかし、今日の科学、自然科学では、その原因はもとより、その内面機構に至るすべてが未知のままである。これを解明する法則を見出せていない。が、この「事実」の解明を心霊科学は理論と実験によって明快に、一般人に納得のゆくよう解いているのである。したがって、心霊科学が分類した種々相の心霊現象も、一例外なく実験・実証しているのである。

これを別言すれば、今日までの科学で発見できなかった宇宙の法則を、心霊科学はつぎつぎと発見、これらの応用に努めているといえよう。

かくして、この研究は1852年に到って心霊研究協会(通称 SPR)という心霊科学者の

研究とその発表機関を組織し、その業績は他の学界からも協力と承認を得ていたのである。これによって物質科学者から心霊科学に転向した世界的学者といわれた人も数多く輩出した。

#### 心霊研究が遂に霊魂・霊界を認めた

このようにして、この心霊研究がその研究途上において、すなわち心霊現象の実験を進めているうちに、客観的存在である「霊」なるものを科学的に把握し、その本質までも明らかにしたのである。それまでは学者達はそれを迷信といい、荒唐無稽とし、あるものは詐術であるとまで嘲笑していたのである。

さらに研究を進めると、これら霊魂の居住地と云ってよい次元の世界の存在をも確認することに成功し、しかも、その世界が、仏教をはじめ、他の宗教でいうがごとき、“平等の世界”ではなく、“階層の世界”であること、その上位には神霊界が実在することまでも知ることができたのである。したがって、それらを確信できる手段として人間には、幽体の存在が肉体の内部機構に有って複合されていること。しかも、この幽体の深奥には、神体と云ってよい本体を媒介として、この神霊界までも（とはいえ、心の波の媒体であるだけに、そこと直接道交することにはいろいろと困難があるが）道交し、交渉できる可能性（幽顕一致）があることを科学的に立証しつつ、さらには神々について科学的研究の可能性が現実のものとされている今日であるというわけである。しかし、忘れてはならないものに、これら心霊科学の科学的研究には、「霊媒」の存在が不可欠ということである。この霊媒抜きにしては心霊科学の研究と進歩はない。それはちょうど望遠鏡抜きで天文学の研究は、また電気器械抜きで電気学の進歩はないことと軌を一にするのにたとえられよう。

#### 霊媒について

心霊研究には霊媒の存在が欠かせない理由として、一切の心霊現象は、常に何らかの媒体、すなわち霊媒を介して初めて生起するからである。

ところが、生憎く、この研究に十分応えてくれる優秀霊媒者は、そうは沢山存在しない。まして、これら心霊科学の試験台となれるような洗練された霊媒は数少ないのである。このことについて、イギリスの世界的心理学者リーフは、

「一般に霊媒者とされる 100 人のうち、われわれのいう霊媒者と名付け得られる者は、その内たった 15 人である。その残りの 85 人は、①自己催眠、あるいは②詐術者、うち、③20 人は部分的に証拠を提出するが、それだけに、その時の状態に注意が必要である。

以上を除いた残る 15 人。これが死後生存の十分の証拠を呈示することができ、その他の他界の事情を裏付けしながら、霊魂の世界と人間界との仲介の可能を立証してくれる」と述べている。このことは正しい。

世間で霊媒といえば、上に述べる残る 15 人と全てを同列に扱い、しかも、その霊媒者を神仏のごとくに崇めようとする。ここに迷信が生まれ、迷信の温床は造られるのである。そして現代人の誤解というものが生まれる。そのことを知るや知らずや。

しかし現代人が、いかにこれらを見殺ししようとしたところで、幾多の心霊現象は、霊媒を中心に生起していることに間違いはない。

そのことを理解していないところから、ある場合は、不思議といい、怪奇といい、奇跡として、これらを神秘視する。しかし、神秘というものはないのである。その時代において解明出来ないというだけのことで、その解明することができないところに現代科学が進歩のプロセスの上にあるといえよう。

心霊科学は、その怪奇といい、奇跡を研究解明し、その理由を明らかにしている点、神秘解明の科学ともいえよう。しかし、重ねて言う。心霊現象は起こるべくして起こる自然現象なのである。

すでに述べてきたように、心霊現象が霊媒を中心として生起する以上、何より大切なことは<いかにして霊媒を取り扱うべきか><どう霊媒と取り扱えば、もっと上手く科学的研究の目的に副い得るか>である。われわれが平素、霊媒に対して払う重要な問題はこれに要約され、この点について、霊媒も含めてその周囲の人たちが最大の関心と注意を払うことが不可欠である点を力説しておきたい。

しかるに、一般の人達は、この生きた器械といってよい霊媒者をもって、生神、生仏と奉ると思えば、神仏の”変身“、”化身“であると考えてしまう。イギリスにおいては、数年前から「霊媒機」の発明に腐心している物理学者と心霊学者、これに加えて電気学者の共同研究団体が発足している。もちろん、この機械の完成は可能であり、それは時間の問題であると筆者は確信している。

そういうことになっても、この霊媒機である霊界通信機を神仏なりと拝むことになるのであろうか。……

実はわれわれ人間すべて、この霊媒機といってよい能力が具わっているのである。その霊媒機と言える受信機を自らで毀わし、十分利用していないどころか、利用方法も知らない。そのことを知らぬ人・気づかぬ人がいかに多いことか。

この事実も知らず、多くの一般人、ことに宗教人には、この霊媒者に対する態度は、現在のところ、崇拝か、排斥かの両極端に偏していると言いたい。たとえば、「霊視能力

が開けた」、「病氣直しができた」というと、一部の人たちは、直ちにその人を活神、活仏扱いにするか、他の一部、ことに知識階級の人たちの多くは、これを嘲笑するか、山師だとして罵倒しようとする。その何れもが間違った考えであることに気づくものは少ない。

一体、霊能力なるものは前述したごとく、すべての人に具わっている。が、その優秀なるものは少ないから、これを尊重することは当然であるとしても、これを、全然別物扱いにする必要はない。とって、これらの能力は、他の能力、あるいは各種才能と同様、下手に使った日にはトンデモナイ弊害に醸しかねないが、上手に使えば非常に有力な道具になるといえよう。

この「霊媒的能力」、一般に言えば「霊能力」とは、非物質の世界、すなわち、霊魂の世界との交通能力である。しかも、その霊魂の世界といい、超現象の世界を最初から仮定していたのではない。幾多の心霊現象の研究精査の過程において霊の世界存在の有力な事実を握り、また、肯定せざるを得ないことを、そして霊媒能力は、その世界との交通能力に外ならぬことを、帰納的に結論しなければならざるを得なくなったのである。

今日までのここ十年間に積み重ねられてきた科学的実験によって承認せざるをえなくなった心霊現象の種類はかなりの数に上った。たとえば、透視（千里眼）、自動書記、霊言、物品浮揚、霊の物質化（幽霊）、指紋の手形作成、物品引き寄せ、霊写真、霊光、その他細別すればまだまだ分類できる。

これらの現象の内面機構については、いろいろと学者によって仮説が唱えられているが、つまるところスピリチュアリズム（霊魂説）以外には合理的な説明ができないことになる。と同時に、ここに霊魂と、霊魂の世界を認めざるを得ないことになるのもいえるのである。

しかし、この霊魂の存在も今日では、物質科学によって立証されていることも、それと重なる解明でもあるが、心霊科学独自の立場からの科学的解明は、現代物質科学の発達に寄与している一面も知るべきである。換言すれば、たとえば、物質科学者の発明した器械では感知できない一種の「波」を送ってくる、別世界の存在を物語ることであるが、この「波」の働きが、いかに物質科学の進歩に役立っていることであるかを彼らは知らないのである。これらのことについて、霊界通信は、いろいろと、それに関する示唆を与え、地上人への注意を引こうと努力しているようである。

心霊科学は、未だ、その発達の初期過程にある。それが、超現象世界のどの点まで探求し得るかは、今後の研究の取り組み方次第にかかっている。としても、今日まで到達したところだけでも、それが正しい宇宙観・人生観にどれだけ貢献しているか。これを

無視することはできない。

例えば、もはや、科学的に立証されている①死後人間の意識、個性が永遠に存続している（客観的霊魂不滅の立証）。②死後の世界と人間界との間に密接な因果関係が存在している。③幽明間で間断なく交通が開かれている。この三つの問題だけをとっても（未だ、この外にも認められているものがあるが）、今日の唯物的宇宙観、人生観に影響し、思想上に大革命を及ぼしているかを知るべきである。しかるに、世の学者、ことに宗教家、思想家の中には、強いてホオカブリ主義をもって、しかも自らの手で耳を覆わんとしている人の実に多いことか。このことが、いかに、どれだけ真の文化の発達を妨げ、どれだけ人類の平和と幸福を阻害しているかを、各自、自覚し反省すべきである。

#### 心霊科学の知識を宗教へ

現在、この人間社会にどれだけ困った解決のし難い問題が転がっていることか。たとえば、肉体の病気を取り上げてみても大変なものである。不治といわれ、難病とされ、ことに遺伝性の疾患に対して、現代医学はおそらく研究途上とは言うであろうが、未だ解決にはほど遠いものがある。その一因に、それらの原因が不詳であるということもあろう。物質科学に不明であるからといって、心霊科学的に必ずしも原因不明とはいえないことがある。たとえば、すでに死後霊魂として人間は存続している。その霊魂が、しばしば人間に憑依して病的状態を呈させていることが科学的に立証されている以上、これらの疾患の中には心霊的に解決を要する方法（たとえば、憑依の状態を解いて解決に導く。）が存在しないと、どうして断言し得よう。ことに統合失調症の事例をアメリカのウィックランド博士が独自の心霊的処置によって全癒へ導いている顕著な改善を見るとき、一層その感を深くするものである。実際は社会悪に関連し反映されることが多いと思われる数多くの海、山、空における惨事、これら、一つの除外例なく、精神上的の諸問題と同様、霊魂、霊魂の世界との関連にあることは言うまでもない。

また、神仏の存在についての多くの疑問と、正信と迷信の弁別。まして、これらを考慮するところに、心霊科学と密接な関係をもつ宗教、信仰に基づく諸問題において、ことに重要な示唆が与えられるはずである。言い換えれば、心霊の研究なくして、正しい宗教・信仰には入り得ないということであり。ことに既成宗教においてこそ心霊研究の結果を十二分に取り入れることで、人類の指導救済の役目を一段と、より高く果たしうることを強調したい。